

日 本 の 点 字

第 39 号

目 次

点字の存在に感謝	白井 康晴	…	1
近代日本における点字楽譜の導入	熊沢 彩子	…	9
日本における英語点字表記～英語の教科書・試験問題等への 統一英語点字の導入について～ 日本点字委員会英語点字特別委員会	福井 哲也	…	15
塩谷治先生の思い出	小野 明男	…	27
塩谷治さんを偲んで	金子 昭	…	29
点字関係文献目録（その14）			33
日本点字委員会第50回総会並びに研究協議会報告			39
編集後記			42

2015年3月

日 本 点 字 委 員 会

点字の存在に感謝

日本点字委員会委員 白井 やすはる 康晴

点字の歴史に思う

私は、生まれつきの全盲である。勉強も、趣味も、娯楽も、新しい情報の入手も、ラブレターを書くときでさえも、その多くの場面で点字が大事な役割を果たしてきた。

文字は5千年も前からあった文化で、日本でも千年以上前から使われている。口で言いつ放し、耳で聞いて記憶にとどめておくしかない言葉を残しておくことができる便利な道具である。場所を問わず、時代を越えて、言葉を伝え合うこともできる。頭の中にモヤモヤとある思いを文字にすれば、その思いを整理し、うまく言葉にする手伝いもしてくれる。

このような便利なものが200年ほど前までは視覚障害者の手にはなかったのかと思うと、それまでの人たちの苦勞が偲ばれる。琵琶法師たちや塙保己一はなわほきいちの活躍は世に知られているが、彼らの知識は、口伝えされたものを暗記するほかなかったであろう。

文字というものは既に一般化していたのだから、視覚障害者を前にした人たちは、当然、その文字を触れる形にして教えようとしただろう。その試みは、あらゆる所、いつの時代にも行われただろうが、視覚障害者が自由に読み書きできる手段とはならなかった。19世紀になっても、指で触りやすいような簡単な字形が工夫された。

どうやら手で触るには、凸線より凸点のほうが分かりやすいようだ。線の上はスペースベスしているの、単純にボツボツのほうが指に刺激が大きいということだろうか。この「点」というものを使った文字・点字の恩恵を受けられる世に生まれることができて、本当に良かったと思う。

点字は、通常3行2列からなる6点で構成されている。この6点、これを考案したルイ・ブライユは、その発想のきっかけになったシャール・バルビエの6行2列の細長い点字を真半分に割っただけかもしれないが、指先で捉えるには非常に良い大きさである。4行8点もルクセンブルクの上級者用の点字、点字ディスプレイに表示させるコンピューター点字、漢点字などで使われているが、最下部や最上部の点は、6点点字では前置点で表すような識別点や、アクセントといった補助的な利用しかされていない。

バルビエの文字は、左の列と右の列の点の数のみを使って文字を表すものだったが、

ブライユは、6点の組み合わせ全てを自由に使うことで、6点でも数多くの記号を示した。文字にとどまらず、算数記号、楽譜の書き方も作った。楽譜は、点の組み合わせで音の高さを表す、墨字楽譜とは大きく異なるオリジナルな書き方である。大文字符や数符といった切り替え用の記号を前置することで、63とおりの点の組み合わせの利用範囲を拡大させた。

極東の地・日本に点字が伝わったのは、通信手段が乏しく、また外国との往来も多いとはいえないこの時代、非常に早かったと思う。1820年代にフランス・パリ盲学校内で、ブライユを始め生徒たちが実際に使用しながらその実用性を高め、30年代に教育のうえでも使われるようになり、37年の書物で欧米に広められた点字は、50年ほど後の1890年には日本語に翻案されるに至っているのである。

明治の世を迎え、欧米のあらゆることを学ぼうと派遣された使節団や留学生は、多くのものを日本にもたらし、その旺盛な向学心のお陰か、当時は顧みる余裕などなかったであろう視覚障害教育に関する資料や教具も、日本にもたらされた。京都と東京で視覚障害者への教育が始められたころ、「教育雑誌」に点字に関してもかなり詳細な報告が載せられた。残念ながらこの情報は、教育を始めた心熱い人たちには伝わらなかったようである。関係者に情報が届いていたら、もう5年は早く点字の実験ぐらいは行われていたのではなかろうか。

視覚障害教育において小西信八という人を得たことは、幸運だったと思う。それまでの教師生活での経験からして、盲学校での生徒たちの読み書きの非効率性をなんとかしたいと思っていたことだろう。この仕事に関わるようになってから2年近く経った1887年、東京教育博物館を訪れ、館長・手島精一より点字の存在を教えられる。

工業教育の面で名高い手島氏だが、視覚障害教育にも興味を持ち、3年前にロンドンの博覧会を視察した際には、視覚障害者の指導者的存在であったトーマス・アーミテイジ氏とも面会していた。点字は早速生徒に試みられ、その有効性が確められた。博物館は、2年後に事実上閉館してしまう。

石川倉次氏と小西氏の出会いは偶然だったという。日本語を仮名だけで表記することを目指す「かなのくわい」の研究会の席上、石川氏が、東洋史学者の那珂通世なかみちよ氏と間違えて小西氏に声をかけたというのである。小西氏が盲教育という新たな世界に挑むに当たり、石川氏を熱心にくどいて、ついに石川氏も視覚障害教育の道に転ずることとなった。やがて小西氏は、石川氏に仮名点字の開発を託すのである。

当時は、墨字の日本語でさえローマ字で書くべきという論も盛んだった中、西洋由

来の点字なのだからローマ字のままでよいということにならなくて、本当に良かったと思う。日本人として、墨字と同じように扱える文字があるというのはありがたいことである。

石川氏は、仮名の点字でありながら、当初からローマ字的に母音と子音の組み合わせをも一マスの中に反映させることを考えている。ただ、それを実現させるには、ブライユ由来の6点では組み合わせが足りず苦勞していた。同僚や生徒にも研究仲間を得てその解決策にたどり着き、約3年をかけて日本語点字が誕生する。そこには、墨字では右肩に付ける濁点・半濁点を前置点で表すという、触読に配慮した画期的なアイデアも含まれていた。

小西氏は「かなのくわい」の表音式仮名遣い派として、その歴史に名を残しているような人物である。一般には歴史的仮名遣いが使われていた中、点字では表音式仮名遣いが目指された。当初から促音を特別な記号で表していたことは、それを象徴している。表音式表記は、その多くの知識を耳から得ている視覚障害者にとって、聞いたことをそのまま書き残しておけ、使いやすくなじみやすかったことだろう。拗音の特別な表し方も考えられ、更に便利に表音的表記ができるようになった。

日本人は、小学校低学年でも文章の読み書きを行うが、そういう言語は珍しいのだと聞いたことがある。仮名だけでも、日本語を表すことが可能なお陰である。

日本語点字ができて120年を越えるが、いまだに公式な点字には仮名しかない。日本語を読み書きするのに、仮名だけでもそれほど不便はないことの現れである。多数の鍼灸を中心とした医療従事者が誕生し、音楽家、小説家、エッセイスト、詩人もいる。学術研究に携わっている人もいれば、弁護士になった人もいる。彼らは、このような点字で確かな知識を得られたのである。

2009年に、ルイ・ブライユ生誕200年、石川倉次生誕150年記念イベントの中で行われた点字競技会で、藤原健二氏は、1分間に630文字を読んでみせた。過去にはもっと速い記録も出ているという。点字盤を使っても、墨字の鉛筆やペンを使うのと差を感じることなく記録できることは、しばしば周りの人たちを驚かせてきた。現在の日本の点字はよくできており、実用に高いレベルで耐えうるものなのである。

墨字と点字

20世紀半ばに生まれたコンピューターは、機能の向上と小型化、それらをネットワーク化する技術の発展によって、今や日常生活のあらゆる面になくてはならない道具

となった。点字と墨字の距離をも飛躍的に近づけた。コンピューターに点字を入力すれば、それをすぐに墨字にすることが可能で、コンピューターに入力された墨字情報を瞬時に点字に直し、点字プリンターで紙に打ち出せる。点字ディスプレイを使えば、目の前の機械に点字で情報を表示することもできるようになった。日々コンピューターネットワークでやり取りされる情報を、その場で点字で知ることができる時代になったのである。

このような状況に対応できる点字の必要性をいち早く説いたのが、コンピューターのパイオニアであるアメリカだった。1991年にアメリカ点字委員会(BANA)に対し声を挙げたのは、点字プリンターの開発で知られるT・V・クランマー、現在のアメリカ理数点字の考案者であるアブラハム・ネメスの両氏だった。共に視覚障害者である。要約すれば、次のようなことを述べている。

- ・これまで、楽譜点字を入れなくても、一般点字・教科書点字・理数点字・コンピューター点字の4種の点字がある。それぞれの分野の要求によって開発されてきたものだが、結果、点字は複雑なものとなった。ドルマークの書き方は3種になっている。

- ・小学5年の教科書点訳にさえ、この4種の点字が必要になる。4種の点字を学ぶために、生徒も教員も点訳者も、多くの訓練を強いられている。点字が難しいから「技術」とか「資格」などということが問題になる。点字を覚える労力と時間があれば、その生徒は、医学校に入りドクターを取得し、脳外科の研修を終えているかもしれない。

- ・墨字は伝統によって作られているものなので、互いの記号が重なり合うことがない。記号は事柄に関係なく登場するものであるし、どこにでも出てくることもありうる。それらは特別に習わなくても自然に覚えていくもの。点字も同じでなければならない。

- ・かつての点字は宗教を中心とした教育用であり、娯楽的なものだった。イタリックや句読符が省略され、記号は略称に置き換えられ、ローマ数字はアラビア数字になった。このような一般の文字との隔たりは、点字を視覚障害者だけのサブカルチャーにしている。一般の人に、知的でないとか無教育だと思われかねない。

- ・視覚障害の大人も子どもも、今や一般社会の中で、晴眼者と共に生きている。娯楽的なものに限らず、自己の能力向上と維持のために、ニュースやスポーツ、医療や科学の進歩、自分の関わる分野の最新の開発動向などを得なければならない。様々な

総合的な内容の書物や雑誌を読むことになるだろう。そういうものには、理数記号が、単語や文章と同じように使われている。

- ・こんな点字を使っているのは、12%だと言われる点字使用率を更に下げかねない。

一つの墨字記号をただ一つの点字の記号で表すことを目指した「統一英語点字 (UEB)」は、国際英語点字協議会 (ICEB) での国際プロジェクトとなり、それから20年近い歳月をかけた開発で、実用できる段階に達した。ICEB のメンバー全8カ国が採用を決め、大国イギリスとアメリカも2016年までに UEB への移行を完了することを決定している。

分野間の表記の違いの解消を目指した UEB は、国際プロジェクトとなったことで、各国間の英語点字の差異も無くすこととなった (統一を呼びかけた当のアメリカは、自国のネメス式の理数記号の精神があまりに認められない結果となったので、ネメス記号をも併用することとなった)。文字、句読符、理数やコンピューター用の記号、点字略字、字体の区別を表す記号などを含め800ほどの記号を定めている。前置点を8種に限定し、前置点+残り56の記号で一つの記号を作るという原則を立てているので、原理上は、前置点をいくつも重ねていけば、記号を無限に定めることを可能としている。

UEB は点字と墨字が1対1対応であるから、コンピューターが点訳したものでも、人間の手による校正の必要がより小さくなった。そのため、図書製作コストの削減の面が強調されることが多いが、クランマー、ネメス両氏の発言に見るような点字そのものの弱点を克服させたいという思いも、また切実であったと思う。墨字との1対1の表記が求められる数式やコンピュータープログラムを多用する彼らだからだろうか、1対1でないことへの不満が強調され過ぎている感はあるが、文化の主要な担い手が用いている墨字の内容がそのまま点字で表わせないことは、情報の質の差を生まないと限らない。

彼らの指摘は、日本の点字にもほぼそのまま当てはまる。

2種類のプラスとマイナス、第1カッコを含めれば丸カッコも2種類の記号がある。マイナス記号は、ときにハイフンや棒線として用いられる記号との形上の区別ができない。アスタリスクは第1星印も入れれば3種類、波線も3種類ある。同じ分野内でも、理数分野では、上付き・下付き文字の示し方が2種類あるし、根数を表すには2

種の表記を使い分けねばならない。

一般文章中では誤読なく理数記号が表せないのも、「……に加えて」の意味で用いるプラス記号や、対談者の間にあるカケル記号、同格を表すイコールなどを書くことができない。読点の意味のコンマ、句点を示すピリオド、小数点として用いられる中黒、範囲を表す棒線、句読符の一部として用いられることが増えているスラッシュ、コロン、セミコロン、コーテーションなどには対応する記号はない。郵便マーク、アットマークなども記号として表せないのもである。そういった記号が出てくるたびに、それをどう表現すべきか、点訳者は、文脈まで考えて対応に頭を悩ませてくださっているのである。

墨字上で同じ形の記号は、点字でも分野にかかわらず同じ形で表さなければ、複数の点字を使い分けることの困難さからは解放されない。墨字の人が普通に読んでいるのだから、点字使用者だけが読めないという記号はない。墨字ほどは書物がないので読む機会が少ないという面はいくらかはあるが、点字使用者だから読めない、読まなくてよいという記号はない。

更なる発展を願って

今後も多くの人たちが使う墨字にいろいろな記号がある以上、点字でも、1対1で表せる記号があることは大切なことだと私は思う。その点で本当に問題なのは、漢字が表せないことだろう。

日常使う国語の表記は、第二次世界大戦後の民主化の中で、それまで求められてきたものも含めた大規模な国としての改革が行われた。日常用いる漢字数を制限したり、字体の統一・簡略化が行われた。漢字を用いる煩雑さを軽減する方向に向かってきたわけだが、時は流れ、2010年に改訂告示された常用漢字は、それまでの1945字から2136字になっており、人名用漢字は、当初は100字以下だったものが現在は860字を越えている。コンピューターによる仮名漢字変換入力の進歩と普及のためか、漢字は、一般の人にとってより身近なものとなっているのである。

これまで2種類の実用レベルに達した点字の漢字が知られている。

大阪府立盲学校教諭の川上泰一^{たいいち}氏は、視覚障害者が東洋医学をも含む教科を仮名だけの点字で学んでいることを嘆き、漢点字を考案した。漢字の部首などに対応する点字記号を通常の3行2列の6点で決め、主要な部首を並べていくという構成法である。字の複雑さによってマス数に変動することになるのだが、漢字の始まるマスの①の点

の上と終わりのマスの④の点の上に1点置くことで、漢字の範囲を示した。漢字だけ背が高くなっていることで、漢字中心に日本語文が作られている雰囲気も表せるのだという。1万5千字ほどの配点が完了している。

それに対して、自身視覚障害者である長谷川貞夫氏は、点字で漢字を作るなら、これまでの6点点字で作りたいと考えた。漢字の9割にはその読みを表す部分が含まれていることを重視し、前置点と仮名の点字などを組み合わせて、濁音・拗音の原理で二マスで漢字の音読みを表し、3マス目に同音の漢字を区別するために、訓読みや部首名などから取った仮名を加えた3マスで構成した。音や訓は日常視覚障害者も耳にしているものでもあり、より漢字を身近な位置で捉えやすくもなる。長谷川氏の頭には、コンピューターの文字コードに対応した点字を作ることで、墨字の文章をそのまま点字にする、点字キーボードなどでコンピューターに入力した文字がそのまま墨字にできるということだったので、現在コンピューター上で通常用いられている7千字ほどの漢字や、他の符号類が定義されている。

以上二つの点字の漢字は、教科書や広報などでは使われていない。日点委としては、情報処理用点字の中で、漢字を1対1で表す手段として漢点字・六点漢字を引用できるように符号を設けているだけである。墨字を表す文字の中心である漢字を表す手段を、点字としてもしっかりと持っているべきであり、それについて、日点委も積極的に関わってもよいのではなかろうか。

そうはいうものの、点字の漢字は、どちらの漢字を使ったとしても、仮名で書くより紙面はかさんでしまう。仮名のほうがスリムに書けてしまうという現実がある。それでも、点字ディスプレイの普及によって点字のかさの問題はあまり気にしなくてよい場面も増えているので、部分的に漢字を用いるということも合わせ、もっと墨字をダイレクトに点字で捉えることが広く行われてもよいと思う。

ほとんどの点字資料は、墨字を点訳することで作られている現状からも、これからの点字は、なるべく墨字からの点訳に困らない形にしていくべきだと思う。増え続ける記号類などに対応しないままでいくことは、そろそろ限界である。墨字の世界は、記号類はどのようにでも使われ、外国語や数式などがどんな文章にも簡単に挿入できるような時代になっているので、分野を分けるということにもかなり無理が来ている。

ただ、漢字に代表されるように、墨字にあるものを何でも点字に持ち込むことは必ずしも読みやすい、効率的なものではない。墨字を強く意識した UEB でさえも、字

体の区別の省略や、読みやすくするためのマスあけを認めている。日本語の特質のお陰もあり、今後も仮名の点字が便利に使われていくことだろう。

日本の点字は、漢字を仮名に直して書くことで既に大幅に簡略化しているのだから、墨字のように書ける体系を持ちつつも、他の符号類なども必要な時だけに使う、シンプルな形を目指してはどうか。

近代日本における点字楽譜の導入

筑波大学附属視覚特別支援学校 くまざわ 熊沢 さやこ 彩子

1. はじめに

楽譜を点字で表現するという考えは、点字の開発当時から存在した。点字を考案したルイ・ブライユはパリ訓盲院の音楽科の教師であり、オルガニストであった。そしてブライユの点字の考案は、そもそも視覚障害者に楽譜を伝えることがその動機であったといわれている。実際、点字の楽譜体系への運用は文字より早く、点字考案のわずか10年後にやはりブライユによって一応の完成を見たという（鳥居・林1971:2より）。

ここでは、明治時代の日本における点字楽譜の移入状況を振り返りながら、それをめぐる当道廃止後の視覚障害音楽家たちの活動にスポットをあてて述べる。しかし点字楽譜について述べる前に、まず日本における五線譜の移入について、視覚障害音楽家にスポットを当てながら概観する。

2. 日本における五線譜の移入

日本で初めて楽譜を系統的に調査する計画を実践したのは、明治5（1872）年の学制発布に基づく科目「音楽」の取り扱いに関する研究機関として同12年に設立された、音楽取調掛とあっていいであろう。『音楽取調成績申報書』では、調査の際に記す楽譜について次のように述べられている。「楽曲取調の方法は、従来口伝に出で、楽譜なきものは、之を精究審解して其楽譜を作り、若し其楽譜あるも、各種異様の方法を用いたるものは、之を各国普通の楽譜に改め、精確明瞭に其曲調を記すことを務むべし。斯の如く、諸種の楽曲を同一の基本に帰し、普通の楽譜によりて之を記し、交互相比して其得失良否を考査し、以て取捨を決定するものとす」（伊沢1971:21、二重線は筆者による）。ここで「普通の楽譜」がいかなる楽譜を指すのかについて、具体的に記した記述はない。しかし、教科「音楽」普及要員となるべき伝習生のカリキュラムとして、「第一年前期」には記譜法初歩「黒板上にて五線、四間、上下の間及び短線の名称を会得せしめ……」（伊沢1971:117-119）とある。ここから、「普通の楽譜」が五線譜を指すと解釈するのは妥当であろう。

そして、この調査にあたる人員の一人として、明治13（1880）年6月3日より音楽

取調として出勤し、俗曲改良を担当した三世山勢松韻も含まれていた。

山勢松韻は、1845年に生まれる。3歳で失明し、先代の山勢検校に師事し、明治元(1868)年に山勢検校を襲名して家元となる。そして明治41(1908)年に逝去した。

彼の音楽取調掛での仕事ぶりについては、わずかではあるが次のような言説から垣間見ることができる。例えば『音楽取調成績申報書』には「内外音律の異同研究」に際して以下の山勢のコメントが掲載されている。「……我音律の西律に斉きや否を訊問せしに、箏曲家山勢松韻の如きは、始めてピアノの音を知りたる時より、『其律と箏の調子とは毫も異なる所なし』と云へり」(伊沢1971:47)。ちなみに、音楽取調掛の掛長で、初代東京音楽学校校長となる伊澤修二が、音楽取調の方針の前提を示した以下の言説には、山勢の意見との一致が見られる。「音律の事たる、固より人の性情の自然に出づるものなれば、古今を問わず、東西を論ぜず。殆んど同一に帰すべしと雖ども、其旋法にいたりては、各相異なる所あり。」(伊沢1971:21)。

また、『音楽雑誌』第32号(1893年5月)に掲載された山勢の紹介文では、「氏は時勢の已むべからざるを観破せられ歌曲を西洋音符の組織に改め……」(7ページ)とある。これらの言説からは、山勢は箏曲家としての音楽経験を基に、「ご意見番」的な立場として重宝されていた様子がうかがえ、また視覚障害を持ち、自らでは見ることができないにもかかわらず、五線譜の作成にも実際に携わった様子がみてとれる。

山勢がどのようにして五線譜を理解するに至ったのか、詳細は明らかでない。しかし、明治時代の洋楽移入の様子を記録した、「明治音楽史考」には、当時アメリカから来た御雇外国人メーソンに、山勢松韻が西洋音楽を学んだ様子が記録されている。それによれば、山勢は時折1、2時間ほどメーソンに西洋音楽の初歩と楽理一般について学び、またその際英語までも教えられたようである(遠藤1948:146-147)。また音楽取調掛には、山勢のために、「凸線譜表」というものを特注購入している記録が残っている。これは現在の東京藝術大学には残っておらず、どのようなものであるかは不明である。しかし、現在筑波大学附属視覚特別支援学校に、五線譜に関わる史料が残っており、この史料を調査することによって、あるいは山勢松韻の楽譜理解について何らかのヒントを得られるかもしれない。

筑波大学附属視覚特別支援学校に現在所蔵されている、五線譜の理解に関係すると思われる史料は2点あり、一つは「凸書楽譜」と呼ばれるもの、もう一つは「松脂楽譜」と呼ばれるものである。前者は、五線を浮き出させた譜表の紙に、ボール紙を切り抜いた音符を貼りつけたもので、バイエルの一節とおもわれるフレーズが表現され

ている。ちなみにバイエルは、現在でも日本でよく使用される初心者用のピアノ教本であるが、これは山勢を教えていたメーソンが日本に紹介したものである。後者の楽譜は、「凸書楽譜」と同じ形の五線譜に、松の脂で音符を書いたもので、ここには小学唱歌集の一節が表現されている。この二点の史料は作成年代も不明であり、この史料の作成、使用に山勢が関係しているか否かも不明であるが、おそらく五線譜を理解する目的のために使われたものと思われ、さらに深く調べる必要があると思う。

3. 日本における点字楽譜の移入

近代以前の日本では、当道という視覚障害者の保護機関兼職能集団が存在し、そのなかで鍼灸、あんま、そして箏曲教授の専業が行われていた。すなわち日本の近代以前の音芸能の一端は盲人が占有しており、その意味では音楽取調掛の俗曲改良における山勢の登用もうなずける。しかし明治4（1871）年に太政官布告によって当道制度が廃止されたため、前述の職能で晴眼者にも門戸が開かれた。

一方、前述の学制発布とそれに基づく教育改革の影響は障害者教育にも及んだ。盲人の教育機関として、明治11（1878）年には京都府立盲啞院、同13年には東京の楽善会訓盲院¹⁾がそれぞれ開設され、これらの成立が近代的な盲教育の嚆矢とされている。そして盲学校の職業教育は、主に鍼按、音曲によって発展してきた（佐藤2005:260）。

また点字に関しては、明治20（1887）年に訓盲院から変わった東京盲啞学校教師の石川倉次らが、かな文字への翻案の研究に着手し、点字楽譜に関しては同26（1893）年、同校生徒でありヴァイオリン科に在籍していた佐藤国蔵が研究の末『国民唱歌集』を点訳した。すなわち日本における点字楽譜の移入は、文字の研究から短期間で実現されている。ちなみに佐藤が同校で学習する際、伊澤修二の『音楽取調成績申報書』を用いたこと（鈴木1979:92-93）、伊澤修二が明治23（1890）年の6月から9月まで同校の校長を務めたことは、指摘しておきたい。

日本の点字楽譜研究が一つの結実を見たのが、明治43（1910）年に発行された『訓盲楽譜』である。これは、大河原欽吾著『点字発達史』（1937年、培風館）によれば、東洋音楽学校（現在の東京音楽大学）の校長であり訓盲院音楽科の講師を兼任していた鈴木米次郎が、「英国内外盲人協会」から出版された Edward Watson 執筆による

1) 楽善会訓盲院は、1884年には訓盲啞院、1887年には東京盲啞学校、1909年には盲啞学校が分離されて視覚障害部分は東京盲学校と改称される。本論では、それぞれの時代の名称で呼ぶ。

“Braille musical notations for the Blind 1902”を底本に点字楽譜の基礎を解説したものである。1ページ目の前書きには、この書物の意義が述べてあるので、原文を現代文に要約して下に挙げる。

音楽は徳を養うのに欠くことができないので、教科として普通の楽譜で勉強すべきだが、盲人にそのまま適用することができない。「普通の楽譜」すなわち五線譜では、視覚障害者はそのまま使用することができず、結局口伝で教わったことを暗誦することによって音楽を習得せざるを得ない。しかしそれでは自主練習、備忘には不便である。…（中略）…このままでは、盲人教育の発展が望めない。そこで東京盲聾学校の教員である鈴木米次郎に委嘱し、欧米で刊行されているルイ・ブライユの点字楽譜の解説を記述させ、それを刊行して点字の記述から学びたい者へ広く供する。……

4. 箏曲と点字楽譜

さらにこの点字楽譜組織を邦楽に転用する試みが明治時代末期より行われた。このうち主な3案について、『点字発達史』の記述より整理して述べる。

まず明治39（1906）年ごろより、三輪尚らによって点字楽譜の箏曲への応用が考案された。これは邦楽の「宮・商・角・徴・羽」の各音に、それぞれ点字楽譜の「ド・レ・ミ・ファ・ソ」の表記を当てはめ、音価や各種記号は西洋のものをそのまま用いたものであった。しかしこれは不便も多く、実際の運用には至らなかった。

一方東京盲学校では、明治41（1908）年より教諭の石井重次郎を中心に邦楽点字記号の研究が進められてきた。石井は大正5（1916）年に楽譜『点字楽譜箏曲集』を、同7年に鈴木米次郎とともに『訓盲箏譜入門』（墨字）を刊行し、さらに同書は大正13（1924）年に点字でも発行された（高野1976:20より）。この場合、音高の表記は、西洋音組織の音高の近似値をそのまま採用し、それに邦楽の特殊記号を加える方法が採用された（大河原1937:218-219、高野1976:67より）。ちなみに、東京音楽学校で邦楽調査掛が設置され、邦楽の採譜、演奏が開始されるのが明治40（1907）年である。すなわち邦楽の点字楽譜研究は、この邦楽調査と時期的に並行して行われている。

このような邦楽の点字楽譜に関して、石井自身は次のように述べている（高野1976:21-22）。

元来、箏曲は声を以て声を練磨するのみにして、楽譜なくまた、発声法なく、多くは模倣に止る。然るに楽譜は曲の保存及び普及に役立つものにして、この企ては必ずや邦楽教育上に一時期を画したるものなり。

ここでは『訓盲楽譜』と同様、従来の「模倣」を脱して楽譜を介在する音楽教育への必要性が説かれている。しかし楽譜を用いる目的として、鈴木は練習の際の備忘としたのに対し、石井は「曲の保存・普及」と、より広範な意義を認めていたことが見て取れる。

箏曲家の宮城道雄も、昭和6（1931）年から24年まで東京盲学校の講師を務めていた。そして彼の作曲にも点字楽譜が用いられ、しかも彼の楽譜は西洋の理論に基づき、西洋の楽譜に極めて近い形で書かれたものであった。また彼はこのころ、新日本音楽と呼ばれる新しい邦楽の運動を中心となって牽引していくが、後にこの運動を担った久本玄智、齋藤松声はともに東京盲学校の卒業生であり、点字楽譜を学び、後に自らも積極的に用いた世代である。すなわち点字楽譜は、新たな世代が携えて邦楽の地平を開いていったのである。

ただ、邦楽の点字楽譜に関しては、東京盲学校の方法、そして宮城が関わった関西の方法などを中心に様々な方法が乱立し、これらの統一に着手されるのは、昭和32（1957）年以降の協議まで待たねばならなかった。

5. おわりに

明治時代の当道廃止、そして学制発布は、盲人の音楽の様相を一変させた。音楽における五線譜の導入には盲人も関わる事になり、そして時を置かず盲人音楽家が点字楽譜に出会うこととなったのである。さらに邦楽の楽譜化への取り組みは、点字・五線譜ともに殆ど時差のない状況にあったことが明らかになった。すなわち、楽譜も点字も、ともに近代教育の産物であったこと、それによって、盲人の音楽の様相に劇的な変化をもたらしたことを、本論における結論としたい。

※本論の内容は、2013年3月27日、第10回日中音楽比較研究国際学術会議の開催に際して刊行された論文集に、日中両国語で掲載された同著者の論文「近代日本における点字楽譜の導入」を改編したものである。

※本論中、引用文後の括弧内に記されている語句・数字は引用元の書誌情報である。

これは引用元の著者、刊行年、ページ数の順に記されており、さらに引用文献の詳細は下記の参考文献表に記されている。

参考文献表

- 1893 「正八位山勢松韻君之履歴」『音楽雑誌』第32号。
- 伊沢修二（山住正己校注） 1971 『洋楽事始——音楽取調掛成績申報書』（東洋文庫188）、東京、平凡社。
- 大河原欽吾 1937 『点字発達史』、東京、培風館。
- 遠藤宏 1948 『明治音楽史考』、東京、有朋堂。
- 吉川英史 1965 『日本音楽の歴史』、大阪、創元社。
- 芸術研究振興財団・東京芸術大学百年史刊行委員会編 1987 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第1巻』、東京、音楽之友社。
- 佐藤香織 2005 「視覚障害者と音楽」、河口道朗監修『音楽の思想と教育』（音楽教育史論叢第I巻）東京、開成出版。
- 鈴木栄助 1979 『盲人に音楽を 佐藤国蔵の生涯』（NHK ブックス349）、東京、日本放送出版協会。
- 高野喜長編 1976 『音楽教育百年史』、東京、東京教育大学教育学部雑司ヶ谷分校内音楽教育百年史刊行委員会。
- 鳥居篤次郎訳・林繁男編 1972 『世界点字楽譜解説』、東京、日本文化財団。
- 文部省 1984 『点字楽譜の手引き』、東京、社会福祉法人 日本ライトハウス。
- 文部省編 1910 『訓盲楽譜』、東京、株式会社国定教科書販売所。

日本における英語点字表記 ～英語の教科書・試験問題等への 統一英語点字の導入について～

日本点字委員会 英語点字特別委員会
委員長 福井 哲也

I. 経過説明

英米を含む英語圏各国では、点字の表記法を統一英語点字 (Unified English Braille: UEB) へ移行する取り組みが進んでいる。日本における英語点字の表記は、長年アメリカ式の表記 (English Braille American Edition: EBAE) に準拠してきた経緯から、日本での扱いが大きな課題となっている。

UEB は、英語圏の7カ国 (アメリカ・イギリス・オーストラリア・カナダ・ナイジェリア・ニュージーランド・南アフリカ) が1993年に結成した国際英語点字協議会 (International Council on English Braille: ICEB) において開発が進められてきた。これは、英語点字表記の各国間の違いをなくすとともに、一般文章と理数・情報処理等専門分野の文章を一つの体系で表記できるようにすることを目指したものである。

2004年の ICEB 総会において、UEB は十分に完成された表記法であると認められ、加盟各国の点字委員会に対しその採用が推奨されることとなった。これを受け、加盟各国は順次 UEB の採用を決定し、2012年11月、最後まで残っていたアメリカがその採用を決めた (実施は2016年1月。ただし、理数記号は UEB を採用せず、ネメスコードを引き続き使用するという条件付)。さらに、アイルランドが2012年に ICEB に加わり、2013年12月に UEB の採用を決定している。

このような状況を踏まえ、2014年5月31日・6月1日に開かれた日本点字委員会第50回総会・研究協議会において、UEB の日本での扱いについて討議が行われた。後述のように、UEB は現行表記 (EBAE) と多くの点で差異が認められる。点字略字のうち9つが廃止されたほか、カッコなど符号類の一部も変更され、数符や二重大文字符など指示符類の有効範囲に関する規則も変更された部分がある (Ⅲ. 参照)。

日本においては、英語の教科書等に英語点字が不可欠なことはないが、いわゆる一般の文章中にも略称、英語等の単語、ローマ字書きされた日本語、造語な

ど、アルファベットが溢れている。これらに UEB を無条件に導入すれば、大きな混乱を招くことは避けられない。そういったことも考慮し、討議の結果、日本における UEB の扱いを大きく 2 つに分け、「英語の教科書・試験問題等」には原則として UEB を導入するが、「一般日本語文章」には UEB を導入しないことを基本とする大枠の方針が了承された。

そして、細部を検討するため英語点字特別委員会（以下「委員会」という）が組織された。メンバーは、金子昭・木塚泰弘・白井康晴・福井哲也・堀越喜晴の 5 名で、委員長には福井が指名された。委員会の活動期間は 2015 年 6 月の日点委総会までのおよそ 1 年間である。

委員会では、「英語の教科書・試験問題等」について先に審議することとし、2014 年 7 月 12 日、8 月 30 日、11 月 15 日の 3 回にわたり委員会を開催して検討を重ねた。そして、その結果を「統一英語点字の日本への導入に関する第一次答申」として、11 月 30 日付で日点委会長に提出した。

これを受け、12 月 16 日付で日点委会長名で日点委委員に対し、上記「第一次答申」に対する賛否を問う文書が送付され、2015 年 1 月 22 日、賛成多数で承認された旨の報告があった（承認された内容についてはⅡ. で述べる）。

一方、委員会では引き続き「一般日本語文章」における扱いについて審議を行っている。その結果は 2015 年 6 月の日点委第 51 回総会までに「第二次答申」として提出する予定で、それが総会の議を経て承認されることを目指している。もっとも、この「一般日本語文章」中の扱いに関しては、影響の及ぶ範囲が広く、種々の意見が予想されるので、方針決定に際しては総会での討議を大切にしていかなければならない。なお、実施時期が来るまでの間は、従来どおりの表記を継続されたい。

Ⅱ. 英語の教科書・試験問題等への UEB の導入について

この度日点委で承認された事項を、委員会の「第一次答申」の内容に沿って記し、必要に応じて説明を補足する。

1. 導入範囲

英語圏各国の UEB 採用の動きに対応するため、日本においても、英語を学び英語を使う人たちのための点字資料については、UEB を導入する必要がある。すなわ

ち、英語の教科書や参考書、英語の試験問題、専門書中の英語の引用文や文献リスト等については、しかるべき時期から UEB の使用が望まれる。

ただし、UEB は従来の英語点字の表記（EBAE）と様々な点で差異があるので、特に学校教育において生徒が試験などで不利にならないよう配慮が必要である。

2. 導入時期

具体的な導入時期については、中学校・高等学校の教科書の改訂時期に合わせ、次のようにするのが望ましい。

- ・中学校 1～3 年用教科書等 — 2016 年 4 月から
- ・高等学校用教科書等 — 2017 年 4 月から学年進行で
- ・大学入学試験 — 2020 年 4 月入学の試験から

上記以外の資料についても、読み手の状況等を勘案し、上記の各導入時期に準じて導入時期を判断することが望まれる。

《補足》

中学校の教科書は 1～3 年用が一斉に改訂されるが、高等学校の教科書は「学年進行」で改訂が行われる。すなわち、高校 1 年用は 2017 年 4 月から、2 年用は 2018 年 4 月から、3 年用は 2019 年 4 月からとなる。

2016 年 4 月に高校に入学する生徒は、2019 年 3 月の卒業までずっと改訂前の教科書で学習することになるので、本人が意識的に勉強しないかぎり UEB を知る機会がないことになる。すでに社会人になっている人たちも同様で、これら「UEB 以前の世代」の人たちへの配慮は特に重要である。例えば、4 年制大学卒業者を対象とする就職試験の場合、2023 年 4 月入社試験までは原則として UEB の導入は避けるべきである。

また、各種資格試験等、受験者の学年（年齢）が特定しにくいものに関しては、上記の教科書の改訂時期等を参考に導入時期を判断するとともに、UEB 導入の告知を実施の 1 年以上前から行い、受験者に十分な準備期間を与えること、そして UEB 導入後一定期間は、UEB と EBAE のいずれも受験者が選択しうる体制を可能なかぎり整えることが強く望まれる。

UEB の導入対象となる点字図書・資料を製作している出版所・施設・団体においては、読み手の多様な状況に鑑み EBAE のニーズも相当期間なくならないことを念頭に置きながら、人材育成や仕事の分担などを考えていただければと願う。UEB に

ついて読み手への情報提供を行いつつ、EBAE と UEB が並行して使われる時期を経て、無理のないペースで UEB に移行していくのが望ましい。

3. 読み手になじみの薄い記号類の使用は慎重に

UEB には書体に関する記号、矢印記号、図形記号、数学・理科記号など、多種多様な記号が定められているが、それらが無制限に使用するのではなく、読み手の知識や必要性などを考慮し、シンプルで分かりやすい表記を心がける。また、読み手にとってなじみの薄い記号を用いるときは、巻頭の凡例で解説するなどの配慮を行う。特に、UEB 移行後当分の間は、図書・資料の巻頭に、その図書・資料中に現れる記号類のうち UEB で変更されたものの一覧を掲載するなどの配慮が大切である。

4. 試験問題等に用いるカッコ

UEB では、カッコ類の点字記号が大きく変わり、丸カッコは ⠠⠨～⠠⠩ となった。従来は英語でも日本語でも ⠠⠨～⠠⠩ という共通の記号であったが、UEB ではまったく違う記号のため、日本独自の規則として次のことを決めた。

日本語の交じった英語の教科書や参考書、試験問題においては、(1)、(2)……、(a)、(b)……、(ア)、(イ)……などのナンバリングのカッコに UEB 中でも ⠠⠨～⠠⠩ を使用できることとする。これは、日本語と英語の両方に共通に使えるカッコの符号が必要なためである。このカッコ内は点字仮名体系とし、アルファベットには外文字を前置する。

また、英文中の日本語を囲むカッコとしても、⠠⠨～⠠⠩ が使用できるものとする。

⠠⠨ は UEB ではプライム (') を表すが、前後の文脈から誤読のおそれはまずない。

なお、英文中のナンバリング以外のカッコについては、UEB の記号をそのまま用いるものとする。

5. 試験問題等に用いる指示符、空欄符号

教科書や参考書、試験問題で下線部等を表すには、これまで第 3 指示符の変形 ⠠⠨⠠⠨⠠⠨～⠠⠨⠠⠨⠠⠨ または第 2 指示符の変形 ⠠⠨⠠⠨⠠⠨～⠠⠨⠠⠨⠠⠨ を用いることとされていたが、UEB では語頭略字 com が廃止されたこと、UEB のダッシュ (—) ⠠⠨⠠⠨ がこれらの指示符の閉じ符号の 1・2 マス目と同形であることから、普通の第 3 指示符

(6) to, into, by の短縮語 (略語) の廃止に伴い、1部2章2節7.の一部と8.を削除。

(7) 単語の一部に付された下線などに関する1部2章2節10.は、 $\ddot{\cdot}$ ～ $\ddot{\cdot}$ をナンバリングまたは日本語を囲むカッコとしたことに伴い、下線などを表す記号は $\ddot{\cdot}$ ～ $\ddot{\cdot}$ のみとする旨変更。

Ⅲ. EBAEからUEBへの変更点 (一部のみ)

UEB が、英語圏各国の英語点字表記の統一を図るとともに、一般文章と理数・情報処理等専門分野の文章の表記体系の統一を図るものであることはすでに述べた。

しかし、UEB の最大の特長は、点字から墨字、墨字から点字への変換を、曖昧さを徹底的に排除し一義的に行えるよう、記号体系と表記規則を整備したところにあるといえる。一義的というのは、どんな点字の文字列も一通りに解釈され、どんな墨字の記号も意味内容に関係なく一通りの点字記号に変換しうるということである。

点字から墨字への一義的な変換ということでは、例えば、「 $\ddot{\cdot}$ $\ddot{\cdot}$ $\ddot{\cdot}$ 」という点字はEBAEでは「a4」とも「abled」とも読むことができた。もちろん文脈で自然に読み分けていたわけだが、UEBではbleの略字を廃止したので、これは「a4」とだけ読まれるようになった。EBAEの丸カッコは開き閉じとも $\ddot{\cdot}$ であったのが、UEBでは開きが $\ddot{\cdot}$ 、閉じが $\ddot{\cdot}$ となったのも、曖昧さ排除の一環といえる。

墨字から点字への変換でも、文末の「ピリオド (.)」とホームページアドレスの「ドット (.)」と数字に挟まれた「小数点 (.)」は墨字では同形ということで、いずれも $\ddot{\cdot}$ で表すこととなった。さらに、「点線 (. . .)」も「ピリオド」を3つ並べた $\ddot{\cdot}$ $\ddot{\cdot}$ $\ddot{\cdot}$ で表すこととなった。記号の意味ではなく、もっぱら形で判断されることとなったのである。

このような徹底した「墨字直結主義」と規則の厳格化により、迷わず読んだり書いたりできるようになった部分は確かにあるが、一方で一部の記号はマス数が増えて重たくなり、中には形態的に違和感のあるものも見られるようになったのも事実である。

EBAE から UEB への変更点は多岐にわたるので、その全てをここで紹介することは到底できない。以下に、日常よく使う基本的な文字や記号類を取り上げ、変更点をごく大まかに述べることにする。EBAE と UEB の表記を併記したところは、矢印

(→) の前が EBAE、後が UEB である。

1. 9つの略字を廃止

(1) ble ⠠⠠⠠ 数符と同形のため

double ⠠⠠⠠⠠ → ⠠⠠⠠⠠⠠⠠

abled ⠠⠠⠠⠠ → ⠠⠠⠠⠠⠠

(2) com ⠠⠠ ハイフンと同形のため

come ⠠⠠⠠ → ⠠⠠⠠⠠⠠

composition ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠ → ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠

(3) dd ⠠⠠ ピリオドと同形のため

odds ⠠⠠⠠⠠ → ⠠⠠⠠⠠⠠

address ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠ → ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠

(4) ation ⠠⠠⠠, ally ⠠⠠⠠ 1マス目が大文字符と同形のため

sensation ⠠⠠⠠⠠⠠⠠ → ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠

creation ⠠⠠⠠⠠⠠⠠ → ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠

really ⠠⠠⠠⠠⠠ → ⠠⠠⠠⠠⠠⠠

MacNally ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠ → ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠

(5) to ⠠, into ⠠⠠, by ⠠ 単語間は必ずマスあけとするため

He went to school by car.

⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠

→ ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠

The children ran into the room.

⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠

→ ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠

(6) o'clock ⠠⠠⠠⠠ アポストロフィと大文字符に関する規則を整理するため

She got up at 4 o'clock.

⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠

→ ⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠

2. 単語間は必ずマスあけ

and, for, of, the, with, a の間のマスを詰める規則は廃止 (to, into, by は略語自

→

(2) イタリック体の単語が3語以上続くときは、イタリック連続符 (italic passage indicator) で始め、イタリック終止符 (italic terminator) で閉じる。

He loves *Una Sera di Tokyo.*

参考文献

The Rules of Unified English Braille Second Edition 2013. Edited by Christine Simpson, International Council on English Braille (www.iceb.org)

(UEB に関する資料として、日本ライトハウス点字情報技術センターでは、まず EBAE 習得者向けの UEB 移行のための解説書を近日中に発行予定である。)

塩谷治先生の思い出

日本点字委員会事務局員 小野 ^{あき}お明男

2014年6月23日、突然の訃報に私は驚いた。ほんの1か月少し前に電話で先生とお話ししていたので、本当に信じられない気持ちであった。

塩谷先生は、私が筑波大学附属盲学校（現在の筑波大学附属視覚特別支援学校）の中学部3年生のときの担任である。担任としては1年間であったが、その後も長い間お世話になることとなる。

中学時代、塩谷先生の国語の授業でのエピソードで、強く覚えていることがある。

その時のクラスは7名で、まだ幼かった私たちは、国語の時間にいたずらをしようと考えた。

授業が始まる前、メモ書きを教室に残し、私たちは別の部屋に隠れていた。先生はもちろん心配され、学校中を捜し回ったが見つめることができなかった。

授業が終わった後、私たちは職員室に謝りに行ったのだが、普段はほとんど怒ることのなかった先生が、さすがにその時は本気で怒っていらっしまった。当然のことである。

また、その頃の先生の印象で残っているのは、亜鉛板に点字を打つのがとても速かったということである。あの頃は、まだパソコンで点字を入力し、印刷するという時代ではなく、亜鉛板に足踏みの機械で点字を書き、ローラーにかけて1枚ずつ印刷していた。その頃から、塩谷先生といえば「点字」というイメージができた。

卒業後は、毎年のように行われた中学の時のクラス会を通して、先生と度々お会いすることとなる。これほどたくさんのクラス会を実施したクラスは他にないのではないかと思うほどである。それも、毎回3分の2ほどの参加率であった。このことから、塩谷先生がどれだけ私たち生徒から愛されていたかがよく分かる。

最初の10年ほどは、旅行を兼ねてのクラス会であった。キャンプをしたり、山に登ったり、いろいろな所に出かけた。先生をお迎えしてのクラス会なのに、先生ご自身が積極的に旅行の計画を立てて下さったりした。その後は、クラスメイトそれぞれが家庭を持ったりしたこともあり、都内で集まって飲むというクラス会に変化していった。

旅行の時もそうであったが、メインは夜、皆で話しながら飲む時間である。先生は、

とてもうれしそうに私たちの近況報告を聞いて下さっていた。

最後のクラス会は、2013年の秋であった。先生の体調のこともあり、ご自宅の近くのお店で集まった。その時、私が日本点字委員会に関わらせていただくようになったこと、今後の点字についてなどを、先生とお話することができた。その際、微力ではあるが、今後の日本の点字の発展に少しでも力になればと改めて感じた。

お亡くなりになる2か月少し前、先生からお電話をいただいた。内容は、「附属盲学校後援会の会報に載せる原稿を書いてほしい」という依頼であった。私は、喜んでそれをお引き受けし、学生の頃のことを中心に原稿を書いた。その後、先生から「とても良い文章だった」というメールをいただいた。国語の先生であり、担任であった塩谷先生からこのような言葉をいただき、純粹にととてもうれしかった。でも、これが最後の先生からの言葉となった。

最後の先生との電話では、今年のクラス会についてのお話をした。しかし、それは実施されることはなかった。もうクラス会で先生とお会いし、飲みながらお話しすることはできない。でも、先生との思い出はいつまでも私たちの心の中に残っている。そして、本当に感謝の気持ちでいっぱいである。

塩谷治さんを偲んで

日本点字委員会副会長 金子 昭

点字の指導者を、私たちはまた一人失った。塩谷治さんである。

筑波大学附属盲学校元副校長、社会福祉法人全国盲ろう者協会前常務理事(事務局長)、日本点字委員会元委員の塩谷さんは、2014年(平成26)6月23日に逝去された。享年70であった。

塩谷さんは1964年(昭和39)、早稲田大学に入学した。同級生に、全盲の5歳上の学生がいた。沖縄出身で、子供のころ戦時中の不発弾が暴発して光を失った。まだ返還前の沖縄から苦勞して東京の大学に入ったのに、点字の教科書がなかった。塩谷さんは彼のために教科書を作ろうと点字を学んだが、自分一人ではいくらやってもとてできるわけではないことを知った。そこで朝日新聞の「読者のひろば」に、「こういうことで困っているの、大学生の教科書点訳を手伝ってくださる方はいませんか」と呼び掛けた。応募してきた人たちを中心に点字練習会を開始した。これが点字あゆみの会(1966年創設)につながっていく。早稲田大学点字会(同年創設)も、最初は点字あゆみの会の早稲田会場として設立されたという経緯がある。このことが、その後各地の大学で点訳サークルが起こるきっかけとなった。

沖縄出身の友は、4年生の8月15日に陸橋から飛び降りて自らの命を絶った。後年(2013年)、塩谷さんは彼の遺稿を整理、編集して、真喜屋仁歌集『春想』として桜雲会より発行している。

塩谷さんは生前、次のように語っている。

「ちょうどその頃は、70年安保闘争とか学費値上げ反対闘争が盛んな頃で、デモやストが続いて授業が満足に行えない状態だった。私も含めて、そういう運動の雰囲気に乗れ切れない学生たちが福祉的な活動に向かう、という傾向があった。そういうエネルギーが逆に福祉活動にのめり込んでいく原動力になったともいえる」と。

大学生のテキストを点訳するという活動が、のちの点訳活動に与えた意味は何であろうか。そのうちの二つをあげるとすれば、①プライベート点訳と②専門点訳のさき

がけをなしたということであろう。

①プライベート点訳：点訳活動が始まって以来、それでなくても点字書は少ない、少ないからできるだけ多くの人を読む本から点訳すべきである、と考えられてきた。それをたった一人の人しか読まないが、個人からリクエストのあったものを点訳しよう（プライベート点訳）という発想は、当時としては画期的なものであった。

②専門点訳：従来は、童話・小説などを点訳することが多かったが、ボランティア（当時は「点訳奉仕者」と言っていたと思う）が英語点字、数学点字などの専門的な分野も点訳する、ということは、当時あまり広まっていなかった。塩谷さんは、「当時、英語点訳のできる人は、日本全国に4人くらいしかいなかった」と言っておられた。今日、さまざまな分野に視覚障害者の進学・進路が進む中、外国語、理数、情報処理、楽譜など、さまざまな分野で教材支援が必要とされている。そのさきがけとなった活動であったといえよう。

塩谷さんは大学卒業後、木更津の定時制高校の教員（2年間）を経て、1973年（昭和48）に東京教育大学附属盲学校（現・筑波大学附属視覚特別支援学校）の教員となった。爾来30年にわたり、国語の教師として、国内外で活躍する多くの視覚障害者を送り出した。

2004年（平成16）、同校の副校長を退職後、全国盲ろう者協会の事務局長に転じて、盲ろう者の実態把握や、全国各地での当事者組織の設立に粘り強く取り組んだ。それが、今日の盲ろう者福祉、通訳介助者の育成や派遣事業の全都道府県での実施につながっている。人生のほぼすべてを、視覚障害者と盲ろう者のためにささげた70年であった。

日本点字委員会との関わりについて述べたい。

毎月、日本点字図書館を会場として行われている日点委関東地区委員会・拡大事務局会に出席され、点字表記や日点委の運営について積極的に発言され、私たちに牽引してくれた。

日点委の委員等について。事務局担当委員を1972年度～1981年度、盲教育界代表委員を1994年度～2004年度、学識経験委員を2005年度～2009年度にわたり務められた。委員勇退後は、会友として日点委の働きを支え、見守ってくださった。会計監査委員を2002年度から務め、任期途中であった。

塩谷さんは『日本点字表記法 2001年版』（日本点字委員会）の編集にも携わった。同表記法の「第6章 古文の書き表し方」、および「第7章 漢文の書き表し方」は、「2001年版」で初めて設けられた章だが、この執筆にも大きな力を発揮された。

筆者はかつて、『資料に見る点字表記法の変遷 — 慶応から平成まで（日本点字委員会創立40周年記念事業）』（日本点字委員会編集・発行、2007年11月）の責任編集、およびC・マイケル・メラ著・金子、田中、水野共訳『ルイ・ブライユの生涯 天才の手法（日本点字制定120周年記念）』（日本点字委員会発行、2012年6月）の訳者のまとめ役を担当した。いずれの場合も、不自然な表記、修正したほうがよい表現がないか、事前に、塩谷さんはじめ何人かの方に原稿を見ていただいた。塩谷さんは実に几帳面に原稿に朱を入れて返してくださった。作文の添削を返却された生徒の心境で読んでみたが、実に的確な指摘で、「さすがは国語の先生！」と思ったものである。今はもうその指導も受けられない。

受賞・受章歴について。

2012年（平成24）に、視覚障害者の文化や教育、福祉の向上に貢献した個人や団体を表彰する「第49回点字毎日文化賞」を受賞された。

2014年（平成26）、生前の功績に対し瑞宝小綬章が受章された。

筆者が塩谷さんに最後にお会いしたのは、亡くなる数か月前、日本点字図書館のロビーであった。「塩谷さん、外出しても大丈夫なの」と聞くと、「うん。今度出る『点字表記辞典』新版のお手伝いに来たんですよ。午後の日点委の会は、体調がすぐれないので失礼します。皆さんによろしく」という会話を交わした。

筆者は6月30日の告別式に参列した。前日のお通夜は激しい雷雨の中だったと聞いたが、当日は晴天に恵まれた日であった。塩谷さんの死を惜しむ参会者の長い行列ができていた。何百人いたであろうか。白杖の男性、盲導犬を連れた女性、指点字で会話をする盲ろう者とボランティアの姿が、会場のあちこちで見られた。

東京大学教授・福島智さんのお別れの言葉が印象的だった。「どうなるのだろう、これからの自分の進路は」と不安を抱えて、附属盲学校高等部2年の福島さんは担任の塩谷さんに相談に行った。「そのとき塩谷先生は、『先のことをいろいろ考えたっ

てしかたないよ。日本で盲ろう者の大学進学の前例がないなら、君が前例になればいいじゃないか。うまくいかなければ、またそのとき考えればいいさ。とにかく一步踏み出す、歩きながら考える。それしかないよ。やりもしないうちに、だめだと決めつけてはいけない』と言われました。この先生の一言で私の気持ちはずっと楽になりました。考えてみると、塩谷先生のこの言葉に支えられながら、自分は生きてきたのだと言えるのです」と。

ご長男の純一^{じゅんいち}さんは、「このように多くの方に参列していただき、驚いています。家庭での父しか知らない私にとって、生前、父がこれほど多くの方々に親しくしていただき、愛されていることを知りました」とあいさつされた。

告別式の最後、出棺を前に、夫人靖子^{のぶこ}さんが塩谷さんの愛した歌を無伴奏で歌う声が会場に流れた。「埴生の宿も 我が宿 玉の装い^{よそお} 羨まじ^{うらや}……」。皆、無言で聞き入っていた。愛する人の熱唱する愛する歌に送られて旅立つ——こんな幸せな最期がまたとあるであろうか。

「うまくいかなければ、またそのとき考えればいいさ。とにかく一步踏み出す、歩きながら考える。それしかないよ。やりもしないうちに、だめだと決めつけてはいけない」。塩谷さんが福島さんにアドバイスしたというこの一言は、今も私たち一人ひとりに語りかけているように思えてならない。

ご冥福を心からお祈りいたします。

点字関係文献目録 (その14)

2012年以降に刊行された点字に関する単行本や小冊子、日本特殊教育学会等、障害者の教育や福祉に関する学会において発表された論文、ジアース教育新社発行の「視覚障害教育ブックレット」、社会福祉法人視覚障害者支援総合センターの編集になる「視覚障害—その研究と情報—」(No. 292~316)等に掲載された点字関係の文献を集録しました。

単行本・小冊子等

- 日本点字委員会 『日本の点字 第37号』(直居鉄さんを偲んで 「日本点字表記法」のあり方について 特別講演会「英国における国際統一英語点字の導入過程とその課題」報告 ホームページ開設から1年等) 2013年2月
- 日本点字委員会 『日本の点字 第38号』(小林一弘さんを偲んで 10周年を迎えた日本点字技能師協会に思う 点字を指で読む人、目で読む人を増やしたい — 日本点字普及協会の取り組み “World Braille Usage” に日本語点字はどのように紹介されてきたか等) 2014年2月
- 指田忠司著 『世界の盲偉人 — その知られざる生涯と業績』 桜雲会 2012年11月
- 全国視覚障害者情報提供施設協会 『点訳のてびき 第3版 指導者ハンドブック 第4章 記号類の使い方編』 全国視覚障害者情報提供施設協会 2013年3月
- 全国視覚障害者情報提供施設協会 『点訳のてびき 第3版 指導者ハンドブック 第5章 書き方の形式編』 全国視覚障害者情報提供施設協会 2014年3月
- 日本点字技能師協会編 『点字技能検定試験の対策 過去問題(第13回)の正答と解説』 日本点字技能師協会 2013年4月
- 日本点字技能師協会編 『点字技能検定試験の対策 過去問題(第14回)の正答と解説』 日本点字技能師協会 2014年4月
- マイヤリーサ・ディークマン著 古市真由美訳 『暗やみの中のきらめき — 点字をつくったルイ・ブライユ』 汐文社 2013年4月
- ジナ・ヴェイガン著 加納由起子訳 『盲人の歴史』(「第V部 ルイ・ブライユの世紀」を含む) 藤原書店 2013年4月

- 末田統・加藤俊和・有本圭希・川上リツエ編 『川上漢点字 ― 補助漢字編』 日本漢点字協会 2013年10月
- 木塚泰弘著 『目が見えなくなっ て見えてきたこと』 小学館スクウェア 2013年12月
- 点字学習を支援する会点字表記支援グループ編 『点訳便利帳2008年版第2版』 点字学習を支援する会 2014年1月
- 牟田口辰己・大内進・長岡英司・田中良広著 『教科書点訳の手引』 全国視覚障害児童・生徒用教科書点訳連絡会 2014年3月
- 「点字表記辞典第6版」編集委員会編 『点字表記辞典第6版』 視覚障害者支援総合センター 2014年6月
- 道村静江著 『ここからはじめる点字・点訳のきほん』 ナツメ社 2014年8月

研究誌等の論文

- 牟田口辰己 中途失明児童の点字読速度の発達 特別支援教育総合研究所研究紀要第40巻 2013年3月
- 土井幸輝・西村崇宏・藤本浩志・和田勉・田中良広・澤田真弓・大内進・金子健・金森克浩 紫外線硬化樹脂点字のマス間隔比が触読性に及ぼす影響 特別支援教育総合研究所研究紀要第41巻 2014年3月
- 稲葉妙子・野澤しげみ・田中直子・鈴木志寿香・長岡英司・緒方昭広・坂本裕和・笹岡知子・藤井亮輔・小野瀬正美・納田かがり 解剖学用点図のデータベース化に関する経過報告 筑波技術大学テクノレポート20 2013年3月
- 南谷和範 文書構造提示・ナビゲーションに点字ディスプレイを用いる DAISY プレーヤーの開発 電子情報通信学会技術研究報告 WIT2012-12 2012年9月
- 松田雄祐・渡辺哲也 点字ディスプレイを用いた触覚ゲームの開発 電子情報通信学会技術研究報告 WIT2012-35 2013年2月
- 菅野亜紀・三浦研爾・大田美香・喜多伸一・山口俊光・渡辺哲也・前田英一・高岡裕 自動点字翻訳プログラムの触地図用途向け最適化 電子情報通信学会技術研究報告 WIT2012-95 2013年3月
- 南谷和範 視覚障害者のセーフ・モバイル・アクセスを実現する腕時計型点字ディスプレイの開発 電子情報通信学会技術研究報告 WIT2013-89 2014年3月

- 高木昇 視覚障害者のための触図とその作成支援技術について ― 解説 ― システム制御情報学会誌57号 2013年1月
- 熊沢彩子 近代日本における点字楽譜の導入 第10回日中音楽比較研究国際学術会議論文集 2013年3月
- 原田早苗 国語科における点字の読み書き指導 筑波大学附属視覚特別支援学校研究紀要44巻 2012年7月
- 小学部盲弱教育研究グループ 小学部段階の点字指導：視覚に障害のある児童の点字指導に関する研究会より 筑波大学附属視覚特別支援学校研究紀要45巻 2013年7月
- 浅野慎子 点字の読み書きの力を伸ばす指導 筑波大学附属視覚特別支援学校研究紀要46巻 2014年7月
- 須惠耕二・大嶋康敬・松田樹也・寺村浩徳 全盲児の点字学習を支援する学生協働型社会貢献プロジェクトの実践：音声式点字タイプ教具の導入による点字授業での改善成果報告 熊本大学工学部技術部年次報告集 2014年6月
- 大塚美紀 資料紹介/点字雑誌『六星の光』掲載論稿[墨字訳](6)刊行初期における地方の盲人の教育や生活状況に関する論稿を中心に 東京社会福祉史研究第6号 2012年5月
- 大塚美紀 点字雑誌『六星の光』に見る視覚障害当事者の教育と生活 ― 研究ノート 日露戦争前後の官立東京盲啞学校盲生同窓会を中心に 東京社会福祉史研究第7号 2013年5月
- 大塚美紀 資料紹介/点字雑誌『六星の光』掲載論稿[墨字訳](7)日露戦争に関する論稿を中心に 東京社会福祉史研究第8号 2014年5月
- 森まゆ・小林秀之・青松利明 〈資料〉 点字出版所の技術者における触図作製の工夫に関する実態調査 障害科学研究37巻 2013年3月
- 森まゆ・小林秀之 点図の線の認知に及ぼす点間隔と点サイズの影響 ― 連続した線または点線として認知される点間隔と点サイズの条件 ― 日本特殊教育学会第51回大会論文集 2013年8月
- 森まゆ・小林秀之 点図において連続線または点線として認知される点サイズと点間隔の条件 障害科学研究38巻 2014年3月
- 牟田口辰己 点字読み熟達者の手の使い方に関する研究：軌跡による検討 障害科学研究36巻 2012年3月

- 牟田口辰己 熟達者の点字読みにおける手の使い方に関する研究：画像解析による非
読書時間と同時読みの検討 障害科学研究37巻 2013年3月
- 牟田口辰己 盲学校在籍児童と通常学級在籍児童における点字読速度発達の比較 障
害科学学会 障害科学研究38巻 2014年3月
- 秋元美晴・河住有希子・藤田恵 点字使用者の日本語学習に関する調査：日本語能力
試験点字冊子試験受験経験者の日本語学習 恵泉女学園大学紀要 26号 2014年2
月
- 伊東良輔・武田貴子・中村龍次・柴垣明 中途視覚障害者への点字指導について —
保有視覚・触知覚による概念形成を先行導入した指導の試み 視覚リハビリテーシ
ョン研究第2巻第2号 2013年3月
- 矢部健三・渡辺文治・喜多井省次・内野大介・角石咲子・加藤正志 中途視覚障害者
の点字触読習得を阻むものはなにか？ — 高齢視覚障害者とその他の視覚障害者の
比較から — 視覚リハビリテーション研究第2巻第2号 2013年3月
- 南谷和範 視覚障害者への漢字説明と大学入試センター試験点字冊子問題への字注付
与状況 大学入試研究ジャーナル No. 23 2013年3月
- 大島研介・市原茂 点字読み課題と触覚の感度の関連 基礎心理学研究第30巻2号
2012年3月
- 大島研介 点字触読を制限する知覚特性：空間特性と時間特性の検討 首都大学東京
博士学位論文 2013年3月
- 柏倉秀克 視覚障害児にわかりやすい点字教科書の編集：小学校社会科教科書を中心
に 日本福祉大学社会福祉学会福祉研究104号 2012年
- 川崎和代 我が国初の「点字書面訴訟」 大阪夕陽丘学園短期大学紀要第56号 2013
年12月
- 大武信之・金堀利洋 点字書籍の利活用支援システム 電子情報通信学会技術研究報
告 ET112(500) 2013年3月
- 西脇智子 『図書館史』における「本間一夫と日本盲人図書館」の史実を探る 実践
女子短期大学紀要第35号 2014年2月
- 室田保夫 本間一夫の生涯と事業 関西学院史紀要第20巻 2014年3月
- 石川泰史 絵本の点訳過程にみる全盲者と晴眼者とのイメージの共有手法 成安造形
大学紀要第4号 2013年3月

- キャラミ マースメ・柿澤敏文 専門点訳ボランティア活動の継続動機に組織への帰属意識が与える影響に関する研究 福祉心理学研究第11巻第1号 2014年3月
- 原田早苗 古典の点字表記について 視覚障害教育ブックレット18号 2012年3月
- 高村明良 学習環境を拓げる「点字辞書システム」 視覚障害教育ブックレット18号
2012年3月
- 原田早苗 視覚特別支援学校用中学部国語点字教科書における「古典」の点字表記について(2) 視覚障害教育ブックレット19号 2012年7月
- 原田早苗 国語 点字教科書による児童生徒の学び 視覚障害教育ブックレット20号
2012年11月
- 高村明良 数学 算数・数学の学習を支える力 点字を読み書きする力 視覚障害教育ブックレット20号 2012年11月
- 特集 試験問題の点字表記について 視覚障害教育ブックレット23号 2014年2月
- 原田早苗 点字で学ぶ児童生徒への指導：試験問題の作成
- 原田早苗 国語 試験問題の点字化の際の配慮事項
- 青松利明 社会 点字試験問題を作成する際の基本的な考え方と留意事項
- 高村明良 算数・数学 点字試験問題を作成する際の留意事項
- 石崎喜治 理科 物理分野における点字試験問題作成上の配慮
- 石井裕志 英語 点字試験問題を作成する際の留意事項
- 青松利明 点字試験における解答指導の留意事項
- 鈴木彩 視覚障害教科教育・点字点訳研究会レポート 視覚障害教育ブックレット23号
2014年2月
- 特集 試験問題の点字表記について 視覚障害教育ブックレット24号 2014年3月
- 大財誠 点字でのテスト答案の書き方：小学部段階での指導
- 原田早苗 国語 試験問題の点字化の際の配慮事項
- 青松利明 社会 試験問題を点訳する際の具体的な方法
- 高村明良 算数・数学 試験問題の点字化の際の配慮事項
- 石崎喜治 理科 試験問題の点字化の際の配慮事項
- 石井裕志 英語 試験問題の点字化の際の配慮事項
- 長尾博 これが私たちの目指してきた点字のある風景なのか? 「視覚障害」No. 294
2012年11月

- 長岡英司 就業場面における点字の活用を考える 「視覚障害」No. 298 2013年3月
- 橋本京子 広がれ絵本のバリアフリー！点字つき触る絵本3社から同時出版 「視覚障害」No. 299 2013年4月
- 当山啓 常にチャレンジ精神旺盛で生き抜いてきた日本点字委員会会長の木塚泰弘さん 「視覚障害」No. 301 2013年6月
- 長岡英司 立体模型を題材に試作点図を比較検討 — 教点連セミナーで講演とディスカッション 「視覚障害」No. 303 2013年8月
- 込山光廣 点字に関する資格制度の推移と今後 「視覚障害」No. 306 2013年11月
- 白岩康平 情報処理教育における点字の活用について — コミュニケーション手段としての点字の重要性の再確認 「視覚障害」No. 306 2013年11月
- 原田良實 点字触読指導者養成講座開催報告 「視覚障害」No. 307 2013年12月
- 加藤俊和 触図の世界を拓げる新点図プリンタへの期待と触図情報の留意点 「視覚障害」No. 309 2014年2月

日本点字委員会第50回総会並びに研究協議会報告

2014年5月31日（土）～6月1日（日）、横浜あゆみ荘において第50回総会並びに研究協議会が行われた。委員20名、事務局員4名、会友4名、オブザーバー等20名、計・48名の出席があった。

総会

(1) 両界代表委員協議会より、学識経験委員として10名を選出した旨の報告があった。

(2) 第12期（2014年度～2017年度）役員等が下記のとおり改選された。会長：木塚泰弘、副会長：金子昭・渡辺昭一、事務局長：当山啓、会計監査委員：塩谷治・高橋秀治、事務局員：小野明男・奥野真里・畑中真弓・畑中優二・和田勉。

(3) 2013年度報告事業・決算、各地域委員会報告、2014年度事業計画・予算などが討議され承認された。

(4) 『資料に見る点字表記法の変遷』の在庫の取り扱いについて承認された。

研究協議

1. 「日本点字表記法」検討委員会中間報告

(1) 表記法検討委員会より『日本点字表記法』検討委員会経過報告（Ⅱ）に基づいて2013年度に4回行われた同委員会の討議要旨が報告された。

(2) 同委員会より、「総会の場で、特に意見交換したいこと」として、下記7点が提起され、意見交換が行われた。①記号は墨字の形と一対一に対応した点字の符号を決めていくほうがよいか、これまでどおり意味や機能別に符号を定める考え方がよいか。②パーセント符号は、形が「外文字 p」と同形だが、現行でよいか、変更するとよいか。③句点の後は二マスあけがよいか、一マスあけがよいか。④第2小見出し符を行の途中にも使用できるように用法を拡張することの是非。⑤脚本・対談のレイアウトについて。⑥『表記法』では表中の数値について位取りが望ましいように表現しているが、数符揃えが一般的か。⑦『表記法』において、レイアウトを示している第5章の役割は何か。

意見交換を受けて、検討委員会において継続して議論していくこととした。

2. 文中注記符についての提案（当山啓）

第4章第3節7. の【注意】を【注意2】とし、【注意1】を新設する。

《【注意 1】文中注記符が句読符やカギ類、カッコ類、指示符類、外国語引用符に接する場合には、句読符の前、カギ類、カッコ類、指示符類の閉じ符号の前、および外国語引用符の閉じ符号の後ろに置くことを原則とするが、必要に応じて、句読符の後ろ、カギ類、カッコ類、指示符類の閉じ符号の後ろに置くこともできる。そのいずれの場合でもマスあけはしない。文中注記符に数字をはさんで書く場合に限り、文中注記符の⑤⑥の点の前から行移しをすることができる。》

議論を踏まえてさらに検討を続けることとした。

3. 数を含む語の書き表し方について（継続議案）

①「数を含む語の読点や中点の省略について」（第49回総会、東海点字研究会提案）について、関東地区小委員会より検討結果が報告された。

②東海点字研究会より、同提案を別の見方からも検討したい旨の発言があった。

③今後の進め方については、新たな提起を待つこととする。

4. 外文字の使用範囲拡大に向けた検討と提案（継続議案）

「外文字の使用範囲拡大に向けた検討と提案」（第49回総会、近畿点字研究会提案）について、関東地区小委員会より検討結果が報告された。

討議を受け、今後、近点研において改めて提案していただき、論点を明らかにして協議することとした。

5. UEB の日本への導入に関する提案（近畿点字研究会）

「統一英語点字（UEB）の実像と日本への導入に関する提案」に基づいて「具体的変更点」「UEB で墨字と点字の機械変換が可能になったか」「UEB 導入の影響」について説明があった。次いで、「日本の英語点字への UEB 導入に関する提案」が下記のとおり行われた。

《日本における英語点字の扱いを「英語の教科書・試験問題等」と「一般日本語文章中」の二つの場合に分ける。前者には原則として UEB を導入するが、後者には一部の記号関係のルールを除き UEB は導入しないこととする。》

討議ののち、下記のとおりまとめられた。

①英語の教科書用と一般表記用の 2 本立ての方向性が承認された。

②2016年度発行の中学部教科書における UEB の扱いを検討する委員会を設置する。2014年の暮れくらいまでに、ほぼ結論が出るように作業を進める。決定した内容について委員の確認を得る。

6. 「医学用語の点字表記について」の検討（継続議案）

2013年度研究協議会において、金子昭・藤野克己・加藤三保子3氏による「『医学用語の点字表記について』に対する問題提起」が提出された。それを受けて、近畿点字研究会、関東地区小委員会、および宮村健二委員より、検討結果が発表された。

討議を踏まえ、「各地の検討でも、問題がないわけではないが、今すぐ変えようということには至っていない」とまとめられた。

7. 日本点字普及協会の活動について

「点字を指で読む人、目で読む人を増やしたい ― 日本点字普及協会の取り組みについて ―」に基づいて報告が行われた。

8. 『教科書点訳の手引き』（教科書点訳連絡会〔教点連〕）の発行について紹介があった。

編集後記

「日本の点字」第39号をお届けします。統一英語点字（UEB）について、委員の意見のとりまとめなどに時間がかかり、発行が遅れました。早々と原稿を提出して下さった方々、読者の方々にお詫び申し上げます。

巻頭言「点字の存在に感謝」（白井康晴さん）。歴史的な視点も踏まえつつ論を進め、「日本の点字は、墨字のように書ける体系を持ちつつも、他の符号類なども必要な時だけに使う、シンプルな形を目指してはどうか」と、点字触読者としての立場を披瀝しておられます。

「近代日本における点字楽譜の導入」（熊沢彩子さん）。日本の点字翻案の完成したのが、1890年（明治23）ですが、点字楽譜に関しては1893年（同26）、東京盲啞学校生徒であった佐藤国蔵が『国民唱歌集』を点訳した記録があるといえます。点字楽譜の移入は、文字の研究から短期間で実現されていることに驚かされます。

「日本における英語点字表記 — 英語の教科書・試験問題等への統一英語点字の導入について」（英語点字特別委員会・福井哲也さん）。「日本の点字」でもしばしばお伝えしているように、英米を含む英語圏各国では、点字の表記法を統一英語点字（UEB）に移行する取り組みが進んでいます。日本において、英語点字の表記は長年アメリカ式の表記に準拠してきた経緯から、その扱いが大きな課題となっています。日本においては、「英語の教科書・試験問題等」における扱いと「一般日本語文章」における扱いと二つに分けて考えていきたいと思っています。今回は前者の「英語の教科書・試験問題等」における扱いについての日点委の見解です。ご質問・ご意見などがあればお寄せいただければと思います。

1994年度、および1998～1999年度、日点委委員であった岩井和彦さんが2014年10月29日、入院中の堺市内の病院において逝去されました。享年65の若さでした。岩井さんは、小学校2年生の時に失明され、大阪府立盲学校専攻科理療科を経て、同志社大学文学部社会学科を卒業。日本ライトハウス点字情報技術センター所長を経て、堺市立健康福祉プラザ視覚・聴覚障害者センター長をされておられました。10年前に大腸

がんを発症されて以来闘病を続けながら、最後まで情報バリアフリーの夢に命を燃やされた方でした。心より哀悼の意を表します。

話は変わりますが、三上延^{えん}の『ビブリア古書堂の事件手帖』（メディアワークス文庫）のシリーズが、今よく売れているそうです。2014年12月現在、シリーズ累計の発行部数は600万部を越えました。古書に関して並外れた知識を持つ、美貌の古書店主・榎子^{しおりこ}が、客が持ち込む古書にまつわる謎を解いていくミステリーです。その第4巻に、なんと日点委の『資料に見る点字表記法の変遷——慶応から平成まで』が参考文献として挙げられています。江戸川乱歩^{らんぽ}の『二銭銅貨』を扱うためだと思われます。『二銭銅貨』は乱歩の処女作であり、日本最初の本格探偵小説ともいわれる作品です。その中で乱歩は、点字を暗号として使っています。『ビブリア…』のこの巻に、榎子が点字を元にした暗号文を読み解くところが出てきます。解説にとりかかりますが、『二銭銅貨』に登場する暗号解読法を用いても、解くことができません。これは、『二銭銅貨』の戦前版では間違っていた拗音の書き方が、戦後版では、作者が点字の誤りに気がついて訂正している、というのがミソです。もっとも戦後発行されたものでも、1923年（大正12）の初出を底本としたために、点字の誤りを引き継いでいるものもあるようですが。

「ちょ、しょ」は ㇿㇿ 、 ㇿㇿ と書くべきところを、戦前版では ㇿㇿㇿ 、 ㇿㇿㇿ と書いていました。拗音点 ㇿ を小文字符として用いていたのです。それが戦後版では ㇿㇿ 、 ㇿㇿ と修正されました。拗音符の使い方が戦前版と戦後版とでは違いがあることに気がついた榎子は、やっと依頼された金庫の暗証文字の解読ができたという内容です。一般の方が点字のことを取り上げてくださるというのは、ありがたいことです。ましてや日点委の本を参考文献として読んでくださったなんて…。

第6巻で三上は、太宰治の『盲人独笑』を登場させています。『盲人独笑』は、江戸から明治にかけての箏曲家、葛原勾当^{くずはらこうとう}の『勾当日記』をモチーフにした作品です。

終わりに、全国各地で点字の活動に尽力されておられる方々のご活躍をお祈り申し上げます。
(金子昭)

日 本 の 点 字 第39号

2015年3月20日発行

発 行 日 本 点 字 委 員 会

〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1-23-4

日本点字図書館内

電話 (03)3209-0671

FAX (03)3209-0672

振替口座 00100-1-42820

ホームページ <http://www.braille.jp/>

印刷所 コロニー印刷

〒162-0034 東京都中野区江原町2-6-7
